

日本におけるロールシャッハ法黎明期の研究の特徴

佐渡 忠洋*1・伊藤 宗親*2・田中 生雅*1・山本 眞由美*1

本研究では、わが国のロールシャッハ法黎明期における研究特徴を明らかにするために、1930年から1959年までに報告されたロールシャッハ法に関する文献、計273編を検討した。具体的には、①報告数の特徴、②研究内容の特徴、③研究者の特徴、を検討した。その結果、i) 1950年代に報告数が急増したこと、ii) 1930年代は精神科臨床と基礎研究が多かったものの、1950年代には多方面からの研究がなされたこと（特に非行や犯罪に関する研究、人類学的な研究、心理的要因とRIM結果との相関を捉えようとする研究が増加したこと）、iii) 1930年代には岡田強と内田勇三郎の研究が、1950年代には本明寛・祖父江孝男・藤岡喜愛・長坂五朗・片口安史が多くの研究を発表しており、それらが後の研究に影響を与えたと考えられることが明らかとなった。さらに、今後の研究の課題も明らかになった。

〈キーワード〉 文献レビュー、研究内容、研究者

I はじめに

1 背景と目的

ヘルマン・ロールシャッハ (Hermann Rorschach : 1884-1922) やロールシャッハ法 (Rorschach's Inkblot Method ; RIM) に関する歴史学的な研究は、これまでいくつか報告されてきた。例えば、Rorschachの伝記的研究 (Ellenberger, 1954/1999 ; Akavia, 2010)、彼のRIM事例の再検討 (Schneider, 1922-1923, 1937)、RIM以前のインクプロット・テストに関する研究 (Tulchin, 1940 ; Baumgarten, 1943 ; Rosenzweig, 1944)、各国のRIMの歴史的概観 (Woods, 2008)、などである。RIMにまつわるイベントを歴史的な観点から眺めると、RIMの位置づけや課題が新たに見えることがあり、それによって実践者が影響を受け、実践がより豊かになることが期待できる。また、今後のRIMの学問をより洗練させるためには、歴史的な検討は不可欠のものである。したがって、実践的な見地からであろうと、学問的な見地からであろうと、歴史的なアプローチは必須事項である。

わが国では、Kataguchi (1957)、堀見・杉原・長坂 (1958)、片口 (1987)、Ogawa (2004)、安齋 (2007)、

Sorai & Ohnuki (2008) がわが国のRIM事情を概観し、いくつかの特徴を考察している。中でも、安齋の研究は興味深く、内田クレペリン検査で知られる内田勇三郎の業績に焦点をあて、内田がわが国のRIM文化に如何に貢献したかを検討している。しかし、わが国においてRIMがどのように輸入され、どのように発展してきたかは、未だ十分検討されてはいない。

以上から本研究は、わが国のRIM黎明期における研究の特徴を明らかにすることを目的とする。

2 わが国のRIM研究のはじまり

ここで、以後の検討のために、わが国のRIMのはじまりについて素描しておきたい。

Sorai & Ohnuki (2008) が既に記しているように、RIMは1930年頃に心理学者の内田勇三郎 (当時、文部省教育研究所所属) と精神科医の岡田強 (当時、京都帝国大学精神医学教室所属) によってわが国に導入された。それを確認できるのは、1930年の文献である (内田, 1930 ; 内田・松井・本田・谷本・山根, 1930a, 1930b ; 岡田, 1930a, 1930b, 1930c)。したがって、わが国での最初の報告は1930年であるが、当然、輸入過程と研究開始はそれ以前から始まっている。

*1 岐阜大学保健管理センター

*2 岐阜大学情報総合メディアセンター

The Characteristics at the dawn of the Rorschach's Inkblot Method Researches in Japan

1930年以前の特徴については、以下のことが特記できる。第一は、内田（1930）の著書『素質型と其の心理学的診断』の冒頭で示された自作のインクプロット図版が、わが国で制作された最初のインクプロットであると考えられることである。この内田が Rorschach の『精神診断学』を見つけた時期については、秋山（1968）が「1925年の或る日、神田の厳松堂の書架であったとのこと」と報告している。この報告は内田本人から聞いたエピソードかもしれないが、出所は詳しくは記されていない。ただし、1921年の『精神診断学』出版からほんの数年で、わが国に RIM が輸入されていたことは推測できる。

第二は、1923年の『日本心理学雑誌』中に、松本亦太郎（当時、東京帝国大学教授）へ宛てたオットー・クレム（当時、ライプチヒ大学助教授）からの手紙が邦訳して掲載されており（クレム、1923）、そこで RIM への言及が認められることである。ただし、「ロールシャッハによる改訂精神診断法」と検査名が記載されているのみで、言及がわずかである。

ところで、Sorai & Ohnuki（2008）の報告は、幾分内田の業績を重視する傾向にある。RIM が現在の心理士のアイデンティティを支える技法であることは確かであるが、わが国へ RIM を輸入した功績は、内田と岡田の両氏に求めることが妥当であろう。わが国の RIM の輸入を心理士の内田の業績のみに求めることは、慎まなくてはならない。

なお、Rorschach の業績の中で、わが国で最初に引用されたのは、筆者が確認した限り「Zur Pathologie und Operabilität der Tumoren der Zirbeldrüse（松果体腫瘍の病理と手術可能性について）」（Rorschach, 1913）であった。田村於兔（当時、岡山医学専門学校教授）の1919年の論文「松果腺腫瘍ノ一例」で引用されている（田村、1919）。これは RIM 研究者からすれば興味深い歴史であろう。というのも、この論文は、RIM のテキスト『精神診断学』とも、Rorschach の力作の宗教研究とも関係がなく、彼の業績の中で唯一の生体病理学的研究であって、Ellenberger（1954/1999）によって「良心的な業績であったが、インスピレーションにもとづいていない」と評された論文だからである。

II 方法

1 検討対象

本研究では、わが国の RIM の黎明期を1959年以前と考え、その時期に報告された273編の文献を検討の対象とする。検討の対象となった論文については、文献一覧（佐渡・田口・伊藤・田中・山本、2012）を参照された。

2 検討の観点と具体的な方法

筆者らは次の3点を検討することとした。それは①報告数（発表論文数）の特徴、②研究内容の特徴、③発展に寄与した研究者についてである。これらの検討を行うことで、黎明期の研究特徴のアウトラインを大まかに浮かび上がらせ、今後の歴史的研究の糸口を得ることができると考える。なお、当初はスコアリング・システムの検討も行う予定であったが、論文の記述から各研究者がどのスコアリング・システムに依拠したかが判断できないものが多かったため、今回はこの検討を見送った。

各観点の具体的な方法は以下のとおりである。

① 報告数（発表論文数）の特徴

筆者らが確認できた黎明期の論文は273編であった。この間に RIM 専門書籍は12冊が刊行されていたが、ここでは戸川行男（当時、早稲田大学助教授）らによって編まれた2冊の『心理診断双書』（戸川・松村・児玉・懸田・小保内、1958a, 1958b）所収の研究のみを論文として扱い、それ以外のは手引書と理解して論文にカウントしていない。報告数の特徴を捉えるために、この論文数の推移を検討する。

加えて、論文数の推移の理解を深めるために、佐渡ら（2012）の文献情報で報告した RIM 専門書籍と RIM を用いた（中心に据えた）博士論文の検討も行う。専門書籍の検討では、1950年から2011年12月までに刊行された123冊を対象とした（非売品を含む）。外国語書籍の邦訳書で二分冊された場合、一冊とカウントしている。博士論文の検討には、題目から RIM を扱ったと理解できた2011年までの95編を対象とした。博士論文の中で RIM を実施したものは他にも多数存在するが、細やかな調査は不可能で、本検討では見送った。

表1 研究内容の分類項目

項目名	内容と説明
紹介	技法の紹介や概論
論考	技法に関する理論的、文献学的な考察をしたもの
発展技法	通常の個別の実施ではなく、集団法や選択法など発展させた実施法について検討したもの
基礎研究	技法のスコアや標準化など基礎的な検討をしたもの
精神科臨床	主として精神科領域のテーマや、精神疾患対象者の結果を検討したもの
発達研究	子どもの発達や発達遅滞（知的障害）の領域で検討をおこなったもの
人類学	人類学、生態学、民俗学の領域で検討をおこなったもの
非行・犯罪	非行に関する研究や、犯罪者と受刑者を対象とした研究
心理的要因	具体的な心理的要因を独立変数として検討したもの
身体疾患	身体疾患をもつ対象者の結果を検討したもの
治療効果測定	心理的援助を行い、その治療効果を本技法で検討したもの
言及	上の項目のどれにも十分あてはまらないか、技法について簡単に述べているだけのもの

② 研究内容の特徴

黎明期の研究の特徴を把握するために、佐渡・坂本・伊藤（2010）が以前に報告したバウムテストの文献レビューを参考にしつつ、今回の対象文献を吟味した上で、表1のように分類項目を設定した。これらは、RIM黎明期における研究特徴を十分表現できるよう配慮して作成したものである。

③ 発展に寄与した研究者

黎明期の273編の論文の著者数は、述べ491名であった。RIMの発展に寄与した研究者を評価するにあたり、本稿では、第一著者に3ポイント、第二以下著者には1ポイントを与え、それらの合計点で評価することとした。論文の特性（学会雑誌か紀要か著書かという掲載される刊行スタイルの要因、査読の有無という学術的信頼性の要因、被引用回数など以後の研究への影響の要因など）への考慮は今回行わなかった。

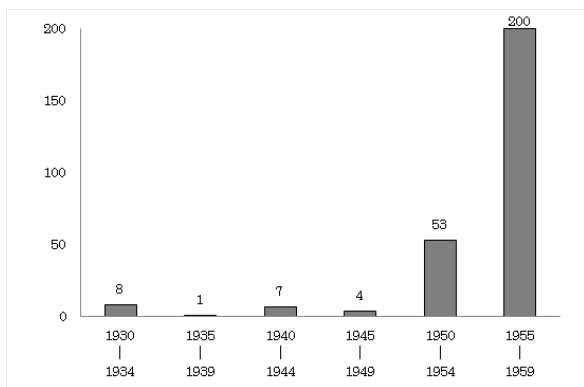


図1 1930年から1959年までのRIM 発表論文数の推移

III 結果と考察

1 発表論文数の特徴

273編の論文を5年区切りでグラフ化したのが図1である。ここより、1950年代に論文数が急激に増加したことがうかがえた。その割合をみると、検討対象期間の文献の93%が1950年代のものであった。したがって、わが国では1930年に研究が始まったのだけれど、実際に研究が活発となったのは1950年代からである。すなわち、わが国でのRIM研究は少なくとも輸入後20年を経てやっと本格化したと考えることができる。

このことには、次の理由が考えられる。第一に、1958年から刊行が始まった市販の研究雑誌『ロールシャッハ研究』の存在である。心理学の一技法を丁寧に扱う雑誌などこれ以前には無く、本誌は稀有な存在であったろう。1958年の第1巻に16編、1959年の第2巻に18編が所収されており、この計34編は論文数増加に影響を与えているはずである。また、本誌が生まれた背景、本誌刊行に力を尽くした研究者たちの存在も、同時に考慮する必要がある。第二に、1939年から1945年の第二次世界大戦と、わが国が1951年まで占領下にあったことも影響していよう。長坂（1958）の体験談から、この時期には、臨床のための心理学と精神医学の研究が停滞したことが推察できる。そして1950年代にわが国が再出発を迎えるにあたり、1940年代にRIMの最盛期を迎えた欧米（Woods, Nezworski, Lilienfeld and Garb. 2003/2006）の影響もあって、心理学と精神医学の両領域における研究では、RIMが研究者と実践家の一部の注目を集めたのだと考えられる。

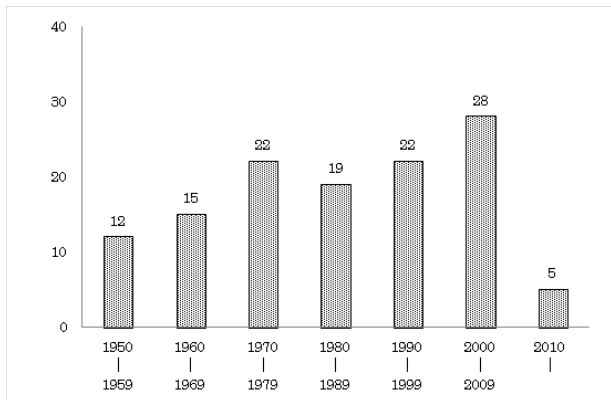


図2 1950年から2011年までのRIM 専門書籍数の推移

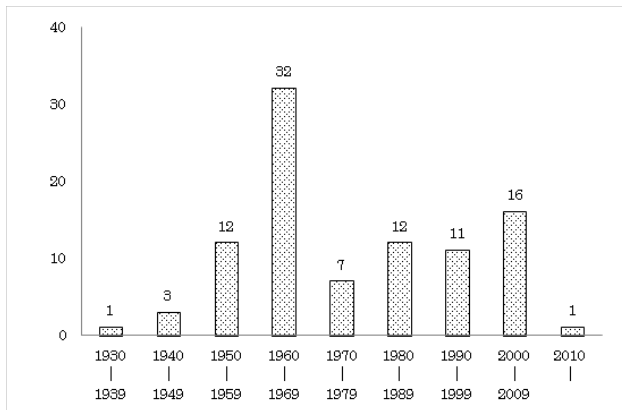


図3 1930年から2011年までのRIM博士論文の推移

次に、専門書籍の計123冊を10年区切りでグラフ化したのが図2である。これより、わが国でRIMの書籍が刊行され始めたのは1950年からであり、現在に至るまで年代を経るごとに概ね増加傾向にあることが示された。本稿の検討対象期間である黎明期に着目するならば、1950年代から発表論文数が増加したことは、手引書等の刊行によって研究環境が整えられたということも関係していると思われる。早稲田大学で研究に従事していた戸川行男と本明寛の手引書(戸川・本明, 1950; 本明, 1952, 1959)、現在でも初学者の教科書として使われる片口安史の『心理診断法』の初版(片口, 1956)、さらには『精神診断学』の邦訳(Rorschach, 1921/1958)が果たした役割は大きい。

博士論文の計95編を10年区切りでグラフ化したのが図3である。ここから、RIMの博士論文は1960年代に最も多いことが示された。1950年代に論文数が増加し始

めたのは、1960年代の博士論文作成に向けた研究が行われてきたためだ、と考えることができないだろうか。つまり、1950年代の論文数増加という動向は、(欧米に20年遅れて)RIMの研究最盛を迎える予兆と捉えることができる。ところで、1970年代以降、博士論文数が停滞したことは、RIMの発展を考える上では残念でならない。これには、世界的に1950年代末よりRIMに対して多方面から疑いの声が出てきたこと(Woods et al, 2003/2006)、他の投映法や心理アセスメント技法が注目され始めたことなどが関係していよう(長坂(1958)が指摘するように、博士論文作成後にRIMを離れた研究者が多いことも誠に残念なことである)。

以上、専門書籍と博士論文の検討から、1960年代をわが国のRIM最盛期と考えるならば、それ以前の1950年代までをわが国の初期RIM文化の形成過程であったと考えることができよう。したがって、本稿で1959年以前をわが国の黎明期としたことは、理にかなっていると考えられた。

2 研究内容の特徴

黎明期の273編の文献を作成した分類項目に従って分類した。また、変遷も追えるよう、5年区切りの分類結果も合わせて表2に示した。

RIMが輸入されて間もない1930年代前半は、「精神科臨床」と「基礎研究」の論文が多かった。このことは、RIM輸入の背景に、精神科実践において患者を理解する手段を臨床家が求めていたことが考えられる。そして理

表2 研究内容の分類結果

	1959年まで 論文数 (%)	1930 1934	1935 1939	1940 1944	1945 1949	1950 1954	1955 1959
紹介	35 (13%)	—	—	4	—	9	22
論考	18 (7%)	—	—	—	—	3	15
発展技法	20 (7%)	—	—	—	1	2	17
基礎研究	44 (16%)	2	1	1	1	7	32
精神科臨床	46 (17%)	3	—	1	3	6	34
発達研究	13 (5%)	1	—	1	—	2	9
人類学	22 (8%)	—	—	—	—	11	11
非行・犯罪	34 (12%)	—	—	—	—	5	29
心理的要因	20 (7%)	2	—	—	—	1	17
身体疾患	10 (4%)	—	—	—	—	2	8
治療効果測定	5 (2%)	—	—	—	—	—	5
言及	6 (2%)	—	—	—	—	5	1

解の精度を高めるために、すぐさま基礎的な研究を行うことで、その方法論を再検討したことを示唆している。

その後の 1935 年から 1949 年までは研究が盛んではなかったため、この期間の特徴を述べることは難しい。1950 年代に入ると研究内容の幅も広がり、多方面から研究が行われるようになった。特に「非行・犯罪」と「人類学」の論文数が増加した点が特徴であろう。「精神科臨床」から入ったわが国の RIM 研究は、20 年の時を経て犯罪学の領域で重宝され、一方で、比較文化的研究の手段としても採用されるようになったといえる。また、「心理的要因」の増加も興味深い。これは、基礎研究や臨床研究によって、また欧米の知見を輸入することで、研究者が RIM で何を捉えようとしているのかが具体的になったためと考えることができる。以上のことは、黎明期という発展上の重要な時期に、わが国では幅広い多方面から研究が行われ、それらが今日の礎を築くこととなったことを示唆しているのではないだろうか。

3 発展に寄与した研究者たち

著者のポイントより、上位 3 位までを表 3 に示した。結果は 10 年区切りで示したが、1950 年代は論文数が多いので、前期と後期に分けて記した。

1930 年代は RIM 輸入に貢献した岡田強と内田勇三郎のポイントが高かった。わが国における最初期の RIM 研究の特徴を理解するならば、両氏の研究を再検討する必要がある。1950 年代になると、早稲田大学で研究に従事した本明寛、人類学的研究を行った祖父江孝男と藤岡喜愛、大阪大学から研究を始めて精神科臨床に従事した長坂五朗、わが国の RIM の歴史で圧倒的な影響を与えた片口安史のポイントが高かった。わが国の RIM の発展過程を捉えるためには、彼らの研究をレビューする必要

表 4 1959 年までの研究者の寄与

ポイント	研究者名	貢献内容など
39	本明 寛	児童反応の標準化、手引書、早稲田大学で研究
32	藤岡 喜愛	人類学への応用、国際的研究
32	片口 安史	『精神診断学』の邦訳、手引書、片口法の提唱
31	長坂 五朗	精神科臨床、大阪大学で研究、阪大法作成
26	田中 富士夫	基礎研究、金沢大学からの普及活動
25	村上 英治	基礎研究、名古屋大学で研究、名大法作成
18	辻 悟	基礎研究、阪大法作成
17	市村 潤	非行臨床、Z テストの研究
16	河合 集雄	Klopfers 法の普及、心理療法への応用
15	Ellenberger, H.F.	H. Rorschach の歴史的研究
15	岡田 強	RIM の輸入と紹介、精神科臨床
15	佐竹 隆三	基礎研究、Z テストとソンディ・テスト
15	高橋 茂雄	基礎研究、実験的研究
12	橋本 健一	RIM の紹介
12	堀見 太郎	阪大法の基盤作成、
12	佐伯 克	非行臨床、Z テスト
11	滝沢 清子	基礎研究、精神科臨床
10	小保内 虎夫	RIM の普及
10	栗林 正男	精神科臨床
10	祖父江 孝男	人類学への応用
10	杉原 方	精神科臨床、ソンディ・テスト
9	今西 錦司	人類学と生態学への応用
9	児玉 省	日本人の反応の研究、日本女子大式の提唱
9	小栗 有恒	非行臨床
9	大平 勝馬	基礎研究
9	外林 大作	RIM の普及と啓発

があるだろう。

次に、黎明期全体で評価したポイントを表 4 に示した。RIM を学ぶ者であれば、一般的にわが国の RIM の歴史に影響を与えたと考えられる研究者が、概ね今回の結果でも上位に位置づけられることになったのではないだろうか。この検討より、今後、RIM の初期の歴史を検討するならば、上位 10 名ほどの研究を吟味する必要があるといえる。

4 今後の課題

本検討を踏まえ、今後、わが国の RIM の輸入過程と

表 3 各年代における研究者の寄与

	1930-1939	1940-1949	1950-1954	1955-1959	
研究者 (ポイント)	1	岡田 強 (15)	橋本 健一 (12)	本明 寛 (12)	長坂 五朗 (28)
	2	内田 勇三郎 (6)	堀内 憲政 (6)	祖父江 孝男 藤岡 喜愛 (7)	片口 安史 (26)
	3	松井 三雄 本田 實昌 谷本 揆一 山根 薫 (2)	宮田 義雄 本明 寛 城谷 敏男 守屋 光雄 佐竹 隆三 (3)	今西 錦司 阿部 孫四郎 片口 安史 村上 英治 外林 大作 (6)	藤岡 喜愛 (25)

発展過程を捉えるためには、次の研究が必要であると考
えられた。

第一に、わが国の RIM の歴史において重要な貢献を
なした研究者の研究をレビューすることである。そして、
彼らの発想と着眼点の特徴を明確にし、その後で与えた
影響も検討する。

第二に、黎明期に得られた各知見が、その後どのよう
に修正・改訂されたかを明らかにすることである。この
検討は、スコアがどのような時代的影響を受けているか
についても意義深い示唆を与えるだろう。

第三に、各スコアリング・システムの発展過程と相互
関係を明らかにすることである。Ogawa (2004) によ
ると、現在わが国では「片口法」「阪大法」「Klopper 法」「名
大法」「慶大法」「エクスマー法 (包括システム)」のスコ
アリング・システムが活用されている。しかし、筆者
が文献を吟味したところ、一昔前までは「東京女子大法」
「早大法」のシステムも認められた。わが国の RIM の
発展過程を捉えるためには、わが国独自のスコアリン
グ・システムの特徴を明らかにすべきであろう。

第四に、わが国で制作された図版を検討することであ
る。黎明期では、内田 (1930) だけでなく、既にわが国
独自の新しいインクプロット図版が作成されていた (守
屋, 1945 ; 阿部, 1950 など)。それらの特徴と限界を明
らかにすることで、黎明期における研究者と RIM 文化
へアプローチできると思われる。

以上の点を明らかにできれば、現在の RIM の背景を
より理解することができ、臨床に寄与する新たな課題を
借定して問題解決を試みるができるであろう。それ
らの検討によって、実践に寄与する新たな仮説を得るこ
とも期待できる。

V おわりに

本稿は、1959 年までをわが国の RIM 研究の黎明期と
捉え、その時期の文献を分類することで、黎明期の研究
特徴のアウトラインを得ることを試みた。検討によって、
i) 初期の研究は精神科実践のために行われていたこと、
ii) 1950 年代から報告数が急増し、研究内容も幅広くな
ったこと、iii) 1930 年代には岡田強と内田勇三郎の研究
が、1950 年代には本明寛・祖父江孝男・藤岡喜愛・長坂

五朗・片口安史が多くの研究を発表しており、それらが
わが国の RIM 発展に重要な役割を担ったと考えられる
こと、が示された。

しかし、今回の検討で黎明期の特徴が十分明らかにな
ったわけではなく、未だ更なる検討を必要とする。引き
続き、研究を行っていきたい。

引用文献

- 1) 阿部孫四郎 (1950). 実態性格の個人検査. In; 性格
調査法. ミネルヴァ書房. pp.124-126.
- 2) Akavia, N. (2010). *Subjectivity in motion :
movement between psyche and soma in the work
of Hermann Rorschach*. Thesis (Ph.D), UCLA.
- 3) 秋山誠一郎 (1968). 内田勇三郎博士とロールシャ
ッハ法. ロールシャッハ研究, IX・X, 241-244.
- 4) 安斎順子 (2007). ロールシャッハ・テストと内田勇
三郎——日本心理学会第 70 回大会ワークショップ報
告 (日本における臨床心理学の導入と受容過程 3).
心理学史・心理学論, 9, 55-58.
- 5) Baumgarten-Tramer, F. (1943). Zur Geschichte
des Rorschachtests. *Archiv der Neurologie und
Psychiatrie*, 50, 1-13.
- 6) Ellenberger, H.F. (1954). The life and work of
Hermann Rorschach (1884-1922). *Bulletin of the
Menninger Clinic*, 18(5), 173-219. [中井久夫訳
(1999). ヘルマン・ロールシャッハの生涯と仕事.
In; 中井久夫編訳, エランベルジェ著作集 1—無意
識のパイオニアと患者たち. みすず書房. pp.3-82.]
- 7) 堀見太郎・杉原方・長坂五朗 (1958). 歴史的発展と
意義. 戸川行男・村松常雄・児玉省・懸田克躬・小
保内虎夫監修, 本明寛・外林大作編, 心理診断双書
第 1 巻——ロールシャッハ・テスト I. 中山書店.
pp.1-39.
- 8) 片口安史 (1956). 心理診断法——ロールシャッハ・
テスト. 牧書店.
- 9) Kataguchi, Y. (1957). The development of the
Rorschach test in Japan. *Journal of Projective
Technique*, 21(3), 258-260.
- 10) クレム, O. (1923). ライプツヒに於ける第八回心
理學大會報告 (一九二三年四月十七日~廿日). 日本
心理学雑誌, 1(4), 539-553.
- 11) 守屋光雄 (1945). ロールシャッハ氏圖形解釋検査
法の吟味. In; 児童心理學研究. 京都印書館.

- pp.297-312.
- 12) 本明寛 (1952). 臨床的精神診断法解説——早稲田大學心理學教室改訂 ロールシャッハ検査. 金子書房.
 - 13) 本明寛 (1959). 人格診断法——ロールシャッハテスト. 金子書房.
 - 14) 長坂五朗 (1958). ロールシャッハ十余年. ロールシャッハ研究, I, 149-157.
 - 15) 岡田強 (1930a). ロールシャッハ氏精神診断學用「テキスト」ノ含ム形態竝ビニ意味ノ研究. 神經學雜誌, **31**(8), 652.
 - 16) 岡田強 (1930b). ロールシャッハ氏ノ所謂「神神診断學」ノ實驗的考察 (第一回報告)——ロールシャッハ氏精神診断學用「テキスト」ニ於ケル形態竝ビニ意味ノ研究. 神經學雜誌, **32**(5), 43-55.
 - 17) 岡田強 (1930c). ロールシャッハ氏ノ所謂「神神診断學」ノ實驗的考察 (第二回報告)——ロールシャッハ氏「精神診断學」ノ施行方法ニ對スル實驗的研究. 神經學雜誌, **32**(6), 41-49.
 - 18) Rorschach, H. (1913). Zur Pathologie und Operabilität der Tumoren der Zirbeldrüse. *Beitrag zur klinischen Chirurgie*, **83**, 451-474.
 - 19) Rorschach, H. (1921). *Psychodiagnostik : Methodik und Ergebnisse eines wahrnehmungsdiagnostischen Experiments [Deutenlassen von Zufallsformen]*. Bern : Hans Huber. [東京ロールシャッハ研究会訳 (1958). 精神診断学——知覚診断的実験の方法と結果 (偶然図形の判断). 牧書店.]
 - 20) Rosenzweig, S. (1944). A note on Rorschach pre-history. *Rorschach Research Exchange*, **8**, 41-42.
 - 21) 佐渡忠洋・坂本佳織・伊藤宗親 (2010). 日本におけるバウムテスト研究の変遷——バウムテスト文献レビュー (第一報). 岐阜大学カリキュラム開発研究, **28**(1), 12-20.
 - 22) 佐渡忠洋・田口多恵・伊藤宗親・田中生雅・山本眞由美 (2012). 1959 年以前のロールシャッハ法邦文献一覧. 岐阜大学カリキュラム開発研究, **29**(1), 24-38.
 - 23) Schneider, E. (1922-1923). Über Psychodiagnostik. *Die Schulreform*, **16**, 37-51, 84-91, 120-124.
 - 24) Schneider, E. (1937). Eine diagnostische Untersuchung Rorschachs auf Grund der Helldunkeldeutungen ergänzt. *Zeitschrift für die gesamte Neurologie und Psychiatrie*, **159**, 1-10. [空井健三・鈴木睦夫訳 (1986). 付 ロールシャッハ自身による診断的研究の一例と明暗反応に基づくその補完. In: Rorschach, H.著, Bash, K.W.編, 空井健三・鈴木睦夫訳, ロールシャッハ 精神医学研究. みすず書房. pp.238-250.]
 - 25) Sorai, K. & Ohnuki, K. (2008). The development of the Rorschach in Japan. *Rorschachiana*, **29**(1), 38-63.
 - 26) 田村於兔 (1919). 松果線腫瘍ノ一例. 岡山医学会雑誌, **31**(352), 385-392.
 - 27) 戸川行男・本明寛 (1950). 臨床的精神診断法手引——早稲田大學改訂 ロールシャッハ検査. 金子書房.
 - 28) 戸川行男・松村常男・児玉省・懸田克躬・小保内虎夫監修, 本明寛・外林大作編 (1958). ロールシャッハ・テスト 1 (心理診断法双書, 第 1 卷). 中山書店.
 - 29) 戸川行男・松村常男・児玉省・懸田克躬・小保内虎夫監修, 本明寛・外林大作(編 (1958). ロールシャッハ・テスト 2 (心理診断法双書, 第 2 卷). 中山書店.
 - 30) Tulchin, S.H. (1940). The pre-Rorschach use of ink blot tests. *Rorschach Research Exchange*, **4**, 1-7.
 - 31) 内田勇三郎 (1930). 素質型と其の心理学的診断. 三省堂.
 - 32) 内田勇三郎・松井三雄・本田實昌・谷本揆一・山根薫 (1930a). 素質の實驗類型心理學的研究 (一). 教育心理研究, **5**, 323-345.
 - 33) 内田勇三郎・松井三雄・本田實昌・谷本揆一・山根薫 (1930b). 素質の實驗類型心理學的研究 (二). 教育心理研究, **5**, 385-417.
 - 34) Wood, J., Nezworski, M.T., Lilienfeld, S.O. and Garb, H.N. (2003). *What's wrong with the Rorschach? : since confronts the controversial inkblot test*. San Francisco, CA : Jossey-Bass. [宮崎謙一訳 (2006). ロールシャッハテストはまちがっている——科学からの異議. 北大路書房.]
 - 35) Woods, J.M. (2008). The history of the Rorschach in the United Kingdom. *Rorschachiana*, **29**, 64-80.

付記

本研究は平成 23 年度財団法人日本学術振興会科学研究費補助金 (若手研究 B : 23730653) の助成を受けた。